

# 第23回 CLINICAL UPDATE FORUM

日時:平成24年4月5日(木) 18時30分～

場所:スイスホテル南海大阪 7F 『芙蓉の間』

大阪市中央区難波5-1-60 TEL:06-6646-1111

\*会場にて参加費1,000円頂戴いたしますので、よろしくお願い致します。

【製品紹介】サノフィ・アベンティス株式会社

【開会の辞】大阪市立大学大学院医学研究科 代謝内分泌病態内科学 教授 稲葉 雅章 先生

【一般講演】 18:45～19:35

座長:医療法人 蒼龍会 井上病院

院長 田畑 勉 先生

講演Ⅰ

『糖尿病腎不全の血糖管理』

—インスリンアナログ製剤、新規経口血糖降下薬による治療戦略—

演者:大阪市立大学大学院医学研究科 代謝内分泌病態内科学 講師

森 克仁 先生

講演Ⅱ

『多発性関節炎へのアプローチ』

—関節リウマチと鑑別すべき疾患—

演者:大阪市立大学大学院医学研究科 代謝内分泌病態内科学 講師

後藤 仁志 先生

【特別講演】 19:35～20:35

座長:大阪市立大学大学院医学研究科 代謝内分泌病態内科学 教授 稲葉 雅章 先生

『沖縄における健康長寿・抗肥満研究』

演者:琉球大学 大学院医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座(第二内科)

教授 益崎 裕章 先生

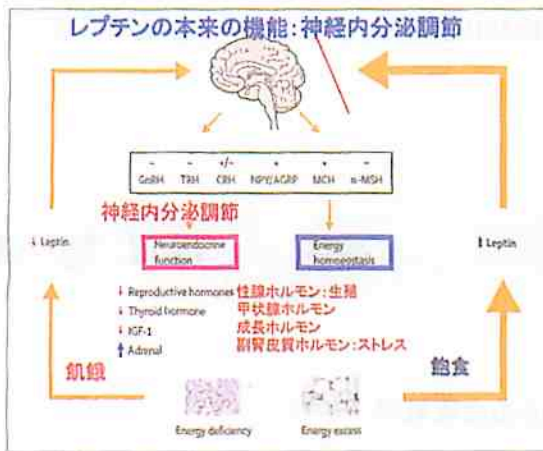
【閉会の辞】大阪市立大学大学院医学研究科 代謝内分泌病態内科学 准教授 絵本 正憲 先生

本研究会は大阪府医師会生涯研修申請中です。尚、講演会終了後に懇親会を予定しております。

共催: CLINICAL UPDATE FORUM  
サノフィ・アベンティス株式会社

受容体を介して甲状腺ホルモンや成長ホルモン、性腺ホルモンの機能を落とし、ストレスに対抗するために副腎皮質ホルモン（コルチゾル）を増やします（図10）。高脂肪食、過栄養の状態では血中レプチン濃度が慢性的に上昇し、ホルモン不応性（レプチン抵抗性）が生じており、レプチンが持つ“痩せさせるパワー”が発揮できなくなります。

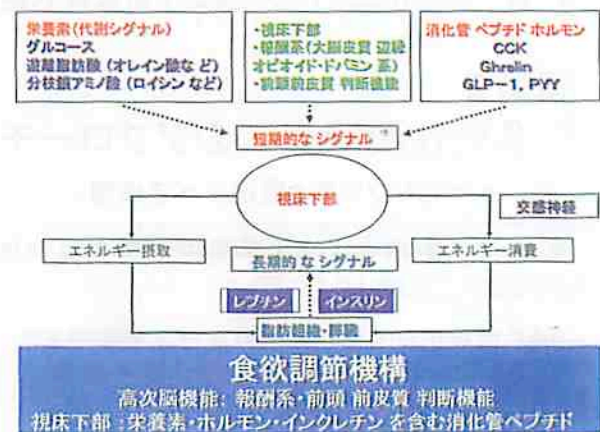
図10



米国の科学雑誌、『サイエンティフィック・アメリカン』に最近、このような特集記事が掲載されました。肥満大国、米国ではこの20年間、莫大なエネルギーと時間、資金とマンパワーを投入して一粒飲めば1発で肥満が解消できる夢の抗肥満薬の開発を目指したわけですが、結果的にその試みは失敗に終わったという反省が込められています。人類は、飢えに対して備えてきた防御システムを持っており、急に環境が変わったと言っても精妙な生体システムを欺く薬の開発はなかなか難しいわけですね。むしろ実行可能性のある身近なヒントは食やライフスタイル、行動変容の科学にある、という原点回帰を提案しており、これまで米国が行ってきた肥満医学研究の軌道修正を促す内容でした。最近では脳科学からもいろいろなことが分かってきております。簡単に申し上げますと、肥満者の脳は麻薬中毒の時と同じような生化学的な反応が起こっているというもので、“にくづき”に“旨い”と書く“脂”（あぶら）を始め、

人工的に創りだされた“美味しいもの”に対する疑似的な中毒状態と捉える事が出来ます。私たちの体重・食欲は実に多彩なメカニズムでコントロールされています。この図に主要な調節因子を纏めておりますが（図11）、例えばグルコース、長鎖不飽和脂肪酸のオレイン酸、スポーツドリンクなどで御馴染のBCAA（分枝鎖アミノ酸）のロイシンなど、特定の栄養成分が脳に働いて食欲を抑える働きがあることが知られています。それから、糖尿病の新しい治療薬の標的分子として話題を集めているインクレチンですね。GLP-1は脳に働くと食欲を抑える働きがあり、注射薬で使われているインクレチン受容体作動薬のように、ある程度、高濃度でGLP-1が血中を循環する状況になると食欲低下作用・体重減少効果が期待されます。レプチンやインスリンなどのホルモンも脳に働いて食欲をコントロールしております。

図11



肥満の研究ではネズミやマウスの実験と人の実験、研究とで必ずしも結果が同じにならない場合があります。そのからくりは、オピオイド、ドパミンなどが支配する報酬系、あるいは前頭前皮質の判断系と呼ばれる高次脳機能が食行動に大きな影響を及ぼしており、人間にはマウス、ラットにはない“別腹”が存在するわけですね。今、満腹でも美味しそうな料理番組を見たり、良い香りのするレストランの前を歩くとまた食べたくなる。過去の快樂の記憶が脳にメモリーされており、同